

〈学術論文〉

1947年度指定文部省教科書局実験学校における 低学年社会科の実施過程 —長野師範学校男子部附属小学校による社会科から 「総合授業」への改編に着目して—

篠崎正典 信州大学教育学部社会科学教育講座

キーワード：成立期社会科，1947年度指定文部省教科書局実験学校，
長野師範学校男子部附属小学校，小学校低学年，総合授業

1. はじめに

成立期の小学校社会科において、低学年社会科を「一教科」と「総合学習」のどちらで行うかは大きな問題であった¹。例えば、1947年11月6日に長野師範学校女子部附属小学校（以下、長野女子附小）で開催された北陸信越地区社会科教育研究協議会のパネルディスカッションでは、低学年社会科を「一教科」か、それとも「総合学習」として行うかについて、文部省教科書局（以下、教科書局）に所属し、『学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）』（以下、『要領Ⅰ』）の編纂責任者である重松鷹泰（1908-1995）と北陸信越地区の師範附属学校の教官との間で意見が交わされた²。ここで、附属学校の教官たちは、低学年社会科を「総合学習」で行うことに関心を示していた。だが、重松は、しっかりとした総合教育ができる段階にないとし、「今の所全面的には賛成出来ない」³ことを主張している。

こうした中で実施された成立期の低学年社会科の状況について、これまでの社会科教育史研究では、十分な検討はなされてこなかった。社会科教育史研究では、『要領Ⅰ』の低学年の単元における道德教育的特質の解明⁴、個別実践における低学年社会科の総合性の解明⁵が行われてきた。また、低学年社会科が廃止され、生活科が新設された際にも、社会科成立当初から、「低学年社会科の存続か廃止かという存廃論」⁶があったことは指摘されてきたが、その実態は検討されていない。したがって、教科書局との関係の中で、低学年社会科が実施された経緯とその実態については明らかにされてきたとは言い難い。

そこで本稿では、1946年12月に教科書局から『要領Ⅰ』の具体化の研究を行うために、1947年度の実験学校に指定された長野師範学校男子部附属小学校（以下、長野男子附小）の動向に着目し、上記の問題について検討する。長野男子附小では、教科書局の青木誠四郎の指導下で、1947年7月に『社会科指導の研究—指導計画—』（以下、第1次案）を発表した⁷。その後、重松による指導、及び先述の北陸信越地区社会科教育研究協議会や当校で開催した研究会での重松の講演内容を踏まえながら、第1次案の実践化を試みた。しかし、1948年9月までに、第1次案を修正して発表した『学習年指導年次計画』（以下、第2次案）では、低学年社会科を「総合授業」として扱うこととなった。ゆえに、長野男

子附小は、当時「総合授業」に否定的な見解を持っていた重松から指導を受けていたにも関わらず、「総合授業」として社会科を実施しようとしたのである。したがって、長野男子附小は、実験学校として作成した第1次案を実践化する中で、低学年社会科を「総合授業」として取り組もうとした実態を検討することは、教科書局との関係を踏まえながら、成立期における低学年社会科の実施状況を捉えることに繋がると考えられる。

当時の長野男子附小による低学年教育の実態については、社会科成立史研究と生活科・総合学習の歴史的研究の中で触れられているが、第1次案から第2次案への修正については、不明な点が多い。社会科成立史研究では、重松と長坂端午（1907-1977）の指導下で中・高学年の単元を削減し、単元名を『小学校社会科学学習指導要領補説』（1948）の「作業単元の基底」に基づいて変更したことが明らかにされている⁸。しかし、低学年については、国民学校期の経験を踏まえて「総合授業」化したという事実の指摘にとどまっている⁹。また、生活科・総合学習の歴史的研究では、当校が1970年代に総合学習を再評価した際に、「昭和二十年代から三十年代にかけては、主として遊びを学習にどう生かすかが研究の中心をなしていた。しかし、明確な発展を見ないまま昭和四十年代を迎えようとしていた」¹⁰という当校の回顧が影響を与えて注目されてこなかった。そのため、先行研究では、低学年児童の学習における遊びに焦点を当て、活動の可能性と方向を模索した¹¹という評価や「社会科に呑み込まれた形」¹²となって衰えたという評価をしている¹³。したがって、長野男子附小が低学年社会科を「総合授業」化した実態を検討することは、成立期社会科の実施状況の問題の解明のみならず、上記の生活科・総合学習の歴史研究における研究史の空白を埋める上でも重要な意味を持つと考えられる。

以上を踏まえて、本稿では、1947年度の教科書局実験学校として社会科の研究に取り組んだ長野男子附小が、第1次案を実施する過程で低学年社会科を「総合授業」化した実態とその背景を明らかにすることを目的とする。そこで本稿では、次の手続きを取る。第一に、終戦後の長野男子附小における低学年教育の動向を整理し、「総合授業」が重視された背景を明らかにする。第二に、国民学校期の「総合授業」から1948年以降の「総合授業」への再編を検討することで「総合授業」の特色を明らかにする。第三に、一と二の成果を踏まえながら、第1次案から第2次案への修正内容を検討し、低学年社会科の「総合授業」化の実態について明らかにする。

2. 低学年社会科の「総合授業」化の背景

2.1 低学年教育の動向

先述のように、長野男子附小は、1947年7月に発表した第1次案を修正し、1948年9月10日に第2次案を発表した。さらに、その8日後の学習指導研究会では、第2次案に基づく授業を公開している¹⁴。ここでは、この間の低学年教育の動向を整理しておきたい。

長野男子附小の低学年教育の動向について、学校日誌を用いて整理したものが表1である。表1から、低学年教育の特色として次の2点が確認できる。1点目は、1946年2月2

1947年度指定文部省教科書局実験学校における低学年社会科の実施過程

表1 低学年教育の動向

年度	月日	研究動向
1945	1月24, 25日	青木誠四郎指導「生活指導と生活調査」
	1月26日	修身・歴史・地理等の授業中止の件について職員会で協議
	2月4日	新教育方針研究委員会の設置について協議
	2月21, 22日	青木誠四郎指導「児童生活実態調査につき」
	2月24, 25, 26日	青木誠四郎指導「生活指導について」
	2月	公民教育の実践に着手
1946	4月14, 15日	青木誠四郎指導「児童研究について、新教育について、新年度事業計画について」
	5月22日	青木誠四郎講演「公民科」「実験学校について」など
	5月26日	職員会、「調査研究物の図表に関して各係より説明「1. 総合授業 2. 公民」
	5月30日	文部省（教科書局調査課）より公民教育の実験学校に指定される
	8月26日	文部省主催新教育研究会報告（神波、伊藤兩教官）文部省主催公民研究会へ参加、研究発表について話し合い
	11月8, 9, 10日	青木誠四郎指導「社会科について」
	12月	文部省（教科書局教材研究課）から実験学校に指定され、国語科、社会科、算数科、理科、図工科、体育科の研究に取り組む
	1月20日	職員会で社会科についての打ち合わせ
	2月2～4日	初等教育研究会。2月3日、 <u>村田好道「総合授業について」報告</u>
	2月27日	卒業生参観で第2時に <u>村田好道が「総合授業」の授業公開</u>
1947	6月13日	文部省教材研究課坪井事務官来校「遊びの調査について」
	6月24日	参観「社会（神波）、算数（山岸）、総合（松下）」
	7月1日	参観「社会（松本）、算数（村田）、総合（深沢）」
	7月3日	参観「社会（神波）、家庭（内山）、国語（橋川）、 <u>総合（松下）</u> 」
	7月10日	『 <u>社会科指導の計画—指導計画—</u> 』発行。（第1次案）
	7月14日	CIE顧問ヘフェナン女史が来校。長野軍政部からケリー、リー女史が同行。
	7月15日	重松鷹泰の講演「社会科について」。
	7月17日	重松鷹泰より「社会科について」指導を受け、5の3が社会科の研究授業を行う。
	7月18日	長野市、上杓両教育会主催にて重松鷹泰の講演（於鍋屋内小学校）
	9月5日	研究授業。市内第2学年会で、 <u>社会科（2-2）の授業公開</u> 。
	9月11日	教生研究授業。社会科（6-3）吉沢芳人。
	9月22日	清水悟郎が主事となる。
	10月21日	倉田教官による教生講話「社会科」。
	11月1日	文部省小宮山事務官来校、懇談する。
	11月4日	文部省坂元彦太郎初等教育課長来校。
	11月5日	教生研究授業。社会（6-1）。
	11月6日	神波、橋瓜、伊藤、松本、腰原、深沢、高地教官、松本の長野師範学校女子部で行われた北陸信越地区社会科教育協議会に参加。伊藤と神波教官がパネルディスカッションに参加。重松鷹泰の講演「作業単元と社会科の指導」をきく。
	12月8日	青木誠四郎の講演「効果判定について」を受ける。
	1月29～31日	初等教育講習会（新教育に於ける個性人間性の意義 新教育と効果判定 国語指導上の主要問題と効果測定 社会科に於ける効果判定 家庭科指導の実際と効果判定 体育科に於けるダンス指導と効果判定 <u>総合授業について</u> 理科指導と効果判定）
	2月9日	青木誠四郎から「カリキュラムについて」指導を受ける。

篠崎

1948	4月12日	係会 社会
	4月13日	係会 統計,教科研究会
	4月14日	係会 文庫,算数,総合学習
	4月17日	係会 社会,総合学習,学校自治,音楽
	4月24日	総合学習打合せ
	5月12日	係会 教科研究会, 五日制委員会
	5月17日	教生研究授業 総合授業(2-3)清水治男 批評会
	5月20日	教生研究授業 社会(6-3)
	5月25日	職員会 指導計画案各科について検討
	6月8日	係会 教科研究会
	7月6日	授業参観(3-3)のため,ケリー来校
	7月9日	教生研究授業 社会(4-2)大島克巳
	7月14日	社会科関心調査
	7月23日	係会 算数, 社会科社会調査
	8月10日	高地, 深沢, 沓掛教官,青木誠四郎宅へ。
	8月29日	長坂端午来校。教科研究会を開催。 午前10時～12時「『社会科補説』について」 午後1時～2時半 質疑 午後3時 係と先生との研究会 午後6時 晩餐会
	9月6日	学習指導研究会のための授業参観。第2時 社会(6-3), 算数(5-2) 第3時 国語(3-3), 国語(6-1) 午後3時半～研究会, レクリエーション係会。午後4時半～社会科係会。
	9月9日	学習指導研究会のための授業参観。 第2時 社会(3-1), 国語(5-1) 第3時 算数(3-1), 算数(6-3)。午後,研究会。午後五時半～職員会。
	9月10日	『学習指導年次計画 総合学習(一・二年)』『学習指導年次計画(三・四年)』『学習指導年次計画(五・六年)』(第2次案)発行。学習指導研究会のための授業参観, 総合学習。午後,研究会。
	9月14日	学習指導研究会のための授業参観。社会(5-3), 国語(4-1), 総合(2-3)。
	9月15日	『学習指導案集録』発行。午後4時～社会科係会(於応接室)。
	9月18, 19日	学習指導研究会を開催:講演「総合教科課程の問題について」(青木誠四郎)「言語教育と文学教育」(西尾実)「社会科指導要領の補説について」(長坂端午)「昭和二十四年度学習指導要領について」(和田義信)
	9月21日	午後3時～8時 職員会 公開授業の反省。

(長野師範学校男子部附属国民学校『昭和二十年度学校日誌』, 同『昭和二十一年度学校日誌』, 長野師範学校男子部附属小学校『昭和二十二年度学校日誌』,同『昭和二十三年度学校日誌』,信州大学教育学部附属長野小学校『開校九十周年学校沿革大要』(1976),信州大学教育学部附属長野小学校百年史編集委員会編『信州大学教育学部附属長野小学校百年史』(1986)より筆者作成)

～4日に開催された初等教育研究会での村田好道教官(在職1940年3月-1950年3月)の講演が契機となって,「総合授業」が再開されたことである。長野男子附小の「総合授業」は,1940年度から第一学年の三組で開始され,1942年10月に成果として『国民学校における総合授業』(信濃毎日新聞社出版部)を発行している。しかし,戦時色が強まる1944年度は,「総合授業」を行わなかった¹⁵。終戦後は,1946年5月26日の職員会で,「調査研究物の図表に関して各係より説明」がなされる中で,「総合授業」も検討されているが,この時期は,公民教育の研究が中心的に行われている¹⁶。こうした中,1946年2月2～4

日に開催された初等教育研究協議会¹⁷では、村田教官が「総合授業について」という題で報告し、2月27日の卒業生参観で授業を公開している。また、6月24日、7月1・3日には、一年三組の松下義敏教官（在職1946年3月-1948年3月）と一年二組の深澤正教官（在職1947年3月-1950年3月）が、授業を公開した。これらを踏まえ、村田が、「文部省実験学校報告書—テーマ児童の数理生活を中心に報告—総合授業の指導案例 昭和21.22年の一事例」として1946・47年度の成果を教科書局に提出している¹⁸。

2点目は、1948年1月29～31日に開催された初等教育研究会¹⁹が契機となり、1948年度から「総合授業」の研究が活発化していることである。長野男子附小は、『昭和二十三年 学校要覧』には、「総合学習事業計画」として、次の内容を載せている²⁰。

（一）指導計画（1）学習単元の設定（2）単元設定の基礎調査（二）学習指導案の体系（三）学習活動の形態 遊戯的な活動形態について（1）学習活動に適切な遊びの種類（2）どんな遊びがどれだけの内容を学習し得るか（3）学習の遊戯化と遊戯の学習化について（四）実証的研究—低学年学習指導の諸問題—（五）資料の整備—研究調査物の整備—
これに基づき、第一・二学年で、「総合授業」の研究を開始した²¹。4月14・17日に係会、4月24日に「総合学習打合会」、5月17日には教生研究授業を行っている。また、9月18・19日の学習指導研究会では、第一・二学年の各組で授業を公開し、青木による講演「総合教育課程の問題について」と分科会での「総合学習の必要・単元構成について」というテーマによる指導を受けている²²。

以上のように、長野男子附小では、1947年1月以降に「総合授業」を再開し、1948年度は、「総合授業」を低学年教育の中心に据えて活発な研究を行っていたことが確認できる。

2.2 「総合授業」を重視した意図

なぜ、1948年以降に、長野男子附小が低学年で「総合授業」を重視したのか。このことについて、「総合授業」を担当した村田教官が、1948年1月に次のように述べている²³。

新制小学校発足二年目の新春を迎え、愈々民主教育の理想を、方法的に確立する決意を新にするものである。扨て、結論的に言えば、特に低学年に於ては、児童の、行動性、情緒性、自己中心性、全体的直観性の特質に立脚して、その学習活動は、社会科の学習一本に切換えることである。

村田の提案は、「児童の行動性、情緒性、自己中心性、全体的直感性の特質」に基づく学習活動により、「民主教育の理想を、方法的に確立する」ために、低学年指導を社会科一本にするものである。それは、村田が、「遊びの生活を組織化」「生活指導計画を樹立」「生活指導の整理としてこの教科科目の系統及び段階を把握」「作業単位及び学習要領を決定」「学習形態を系統的に樹立」という5原則に基づき、「生活指導」による低学年指導を目指したためである。これを踏まえ、村田は、「(イ)教育の実際性、行動性 (ロ)児童の実態調査に基づく教育の科学性 (ハ)社会共同性の強調 (ニ)地域の特性に立脚した教育の自主性、等の新教育の方法的特質が十全に達成されると共に、民主教育の基調をなす人間性の尊重の理

念が実現されていく」²⁴と考えていた。また、先述の第1次案でも、低学年における作業単元選択の基準は、「生活指導を中心とした総合的扱いによる情緒的経験的理解」と定めていた²⁵。したがって、長野男子附小において、村田が示した上記の5原則に基づく低学年指導のために社会科に一本化することは、有効な方法であったのである。

しかしながら、1948年度以降の長野男子附小は、社会科をより大きな「総合授業」で指導することとなる。この背景には、1948年4月の段階で、村田が、「学習の目的はもはや知的発達というような一面的なものにあるのではなく、子供の全生活をあらゆる機会を与えて発達させるもの」²⁶という考えへの転換が関係していると推測される。すなわち、子どもの全生活をあらゆる機会を与えるために、社会科より大きな「総合授業」に着目したのである。そこで、長野男子附小は、「昭和15（1940）年から八年間継続して」²⁷（）は筆者）きた「総合授業」の経験を踏まえて、低学年教育を実施しようとしたのである²⁸。

以上のように、長野男子附小は、児童を「全生活をあらゆる機会を与えて発達」させるために、「総合授業」に着目した。では、1940年から継続してきた長野男子附小の「総合授業」はいかなるものであったか。次に、長野男子附小の「総合授業」の特徴について、国民学校期から1948年以降への再編を検討することで明らかにしたい。

3. 長野男子附小の「総合授業」

3.1 国民学校期の「総合授業」

先述のように、長野男子附小では、1940年度から第一学年で「総合授業」を実施し、1942年に成果として『国民学校に於ける総合授業』を発行した。これは、大正期の研究学級の直接的な継承というわけではなく²⁹、国民学校の使命に基づいて実施されたことに特色がある³⁰。ここでは、この国民学校期の「総合授業」を目的と方法に着目して考察する。

長野男子附小は、「総合授業」の任務として次のように述べている³¹。

総合授業は、単に未分化的な家庭生活から分科的な学校性格に移る過渡期の児童の生活に於ける飛躍的变化を一時的に緩和するための、単なる方法上の橋渡しとしての目的にも立脚するものと考えすることは出来ない。この入学と言ふ環境の変化によって起る児童相応の自覚、心構へを学校生活・家庭生活・社会生活の上に生かし、更に学校生活において全一的総合的の観方考へ方への基礎を養ひ、自修の習慣を養成して、皇国民としての自発的・実践的態度・生涯修業の基礎を啓培すべき教育実践の一階程に立つ方法としての意義をも考へ得るのである。

欺くして初等第一学年に於ては、先ず児童を家庭生活より学校生活へ極めて自然に円滑に導入して、幼児末期の児童心意に即した独自の学校生活をなさしめ初等科第二学年の分科教授への移行を円滑ならしめる所に総合授業の意義が存するのである。

ここから、長野男子附小が、次の二つのことを目的として「総合授業」を実施したことが読み取れる。一つは、児童の心身発達と児童の生活の転換に応じて、家庭生活から学校生

活への移行を円滑にすることである。もう一つは、皇国民鍊成の効果をあげることである。このことについて長野男子附小は、「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲナス」という国民学校の使命に鑑みて、「総合授業」を実施したと述べている³²。

これらの目的の実現のために、長野男子附小は、「児童生活の原理」と「郷土の原理」の2つを方法原理とした。「児童生活の原理」とは、学習の原理となる児童の「生活事実」³³である。長野男子附小は、児童の生活を「日常茶飯事の戯や遊びを主体とする家庭生活」「団体的規律の比較的厳正な学校生活」「附近の友達と相當む遊び中心の交友的社会生活」の領域に分類できるとする。対して、「郷土の原理」とは、児童を皇国民として鍊成するための原理である。長野男子附小は、「郷土」の役割について、次のように述べる³⁴。

一郷土は一特別なる地域には相違ないが、それにも拘らず、国家的活動の最も具体的に顕現する場所なのである。国家は即ち国家の活動、国家の生命をこの郷土において具体的に実現することが出来るのである。静かに思へば、郷土の包む一切が皇国の道の具現に外ならぬのである。児童は国家の相体的活動を大きく全体として認識し得べくもないが、郷土に於ける日常平素の生活に於て、国家活動の具体相、皇国の道の顕現に常に接し、常にこれに包まれているのである。洵に、日常起居動作の茶飯事から、花摘、虫取等の自然生活、さては、出征兵士の見送り、英霊の出迎へ、時局談、物資愛護節約、防空、衛生等々一つとして皇国の道の顕現でないものはない。

児童はかかる事項の展開する郷土的立場において、何等かの形でこれに参加し生活し、その郷土性を通して、児童の能力に応じた国民的自覚がなされるのである。」長野男子附小は、この2つの原理に基づいて初一の教科書³⁵における教材系統の分析を行い、「国家的儀式行事の生活」「民族的行事生活」「学校行事生活」「郷土的自然の生活」「遊戯的生活」からなる計54個の生活題目が選定された（表2）。

表2「総合授業」の題目一覧

	題目
1 国家的儀式行事の生活	天長節 明治節 新年 紀元節 支那事変記念日 陸軍記念日 海軍記念日 大詔奉戴日 日めぐり
2 民族的行事生活	妻科神社 善光寺 端午の節句 七夕祭 祇園祭 お彼岸 お月見 お正月 節分 雛祭
3 学校行事生活	私たちの学校 遠足 校医の先生 私たちの身体 夏休 夏休後の展覧会 お話会 運動会 音楽会 ストーブ 少国民
4 郷土的自然の生活	春の野 城山 おたまじゃくし 花畠 窪寺観音 湯福川原 丹波島川原 裾花川 朝顔 秋の畠 阿弥陀堂 飛行場 落葉 お天気 雪と氷 日なたと日かげ 春
5 遊戯的生活	粘土遊び 箱庭作り 買物ごっこ 物指 兵隊ごっこ お客様 強い子

（長野師範学校男子部附属国民学校『国民学校における総合授業』（1942）50頁より筆者作成）

3.2「総合授業」の再編

続いて、長野男子附小が、1948年度以降「総合授業」を実施するにあたり、上述の国民

学校期の「総合授業」をどう再編したのかについて、目的と方法の点から検討したい。

まず、「総合授業」の任務について、松下教官は、次のように述べる³⁶。

一年生に入学すると、一転して、個々の生活から集団的な生活となり、無意図的な遊びから意図的な規制ある世界へと入れられる事になる。

この大きな飛躍のある生活の変化を子供自体に溝の如く感じさせずに明るくのびのびと移行の出来、然も児童の個性が伸ばされる様に学校生活にひたらされる事が真に望ましい事であると考えられる。

このことについて、「新教育発足一年、国民学校時代からかゝる点を考えて行われて来た」³⁷とし、国民学校期からの連続性について言及する。しかし、ここには、国民学校期の「総合授業」の目的である「皇国民の錬成」はみられない。したがって、1948年以降の「総合授業」は、家庭生活から学校生活への移行期における児童の生活習慣の確立に重点がおかれたと解釈することができる。

続いて、方法の面である。松下教官は、低学年指導の方法として、「(一) 生活や経験に即すこと」「(二) 具体的で興味のあること」「(三) 習慣となる様努める事」の3つを挙げている。(一)(二)は、「総合授業」の学習内容選択に関わる点で、(三)は、(一)(二)に基づく内容で「総合授業」をどこまで行うかという点である。前者の「総合授業」の学習内容選択は、児童の生活の実態である「遊び」把握し、「遊び」による活動を中心に行おうとした。しかし、「遊びを中軸に指導を続けるならば時々の思いつきとなってしまって学習目標が明確にされ得ない」³⁸ため、「一ヶ年の遊びの生活の調査」と「児童生活の調査」を行い、表3の「児童の『遊び』一覧」と表4の「児童の発達」をまとめた。このことについて、長野男子附小は、「先ず児童生活の実態を心境の発達・社会性・生活態度により明らかにし其を郷土性により検討したり能力の発達を考慮して大きな節を見出して、教師の立場からこの節が如何なる問題を持つかを決定」³⁹したとする。また、松下教官は、この際、「総合科である社会科が生活の基本的習慣を形成する立場から中核となって生活指導が果され、他の教科はこの基盤に含まれる基礎的訓練をなす教科」⁴⁰とした。後者は、「総合授業」を第二学年まで拡張したことである。長野男子附小は、表4を踏まえ、第一・二学

表3 児童の「遊び」一覧

遊びの類型	四月の遊び		一月の遊び	
	男子	女子	男子	女子
模倣想像的	石屋ごっこ、まゝごと、学校ごっこ	まゝごと、学校ごっこ	汽車ごっこ、学校ごっこ、売屋ごっこ	お人形あそび、よめごと、まゝごと
勝負事	鬼ごっこ、かくれんぼ、くにとり	鬼ごっこ、かくれんぼ、くにとり	ぱっしん、カルタ、トランプ、双六、花合せ	カルタ、トランプ、花合せ
運動的	まりなげ、まりつき、水遊び	まりつき、水あそび	竹スキー、ソリ、凧あげ	竹スキー、ソリ、追羽根、踊り
構成的	積み木、土いじり、おり紙	積み木、土いじり、人形作り	紙細工、積み木	絵細工、積み木
採集的	蝶取り、虫あつめ、たいこんぼとり	蝶取り	絵あつめ	

(松下義敏「総合授業について(一)」(『信濃教育』第736号、1948)12頁掲載の表をもとに筆者作成)

表4 児童の発達

学年	期	教師の立場	児童の立場	基盤	学習活動の要点
一二年	習慣形成期	指導	受け答え	(実践)	実践に基づき報告
三四年	分別期	補導	情意中心の話し合		同上記録し報告
五六年	自覚期	誘導	話し合		同上計画—修正—計画完成

(村田好道「年を新にして低学年教育に望むもの」(『低学年教育技術』第1巻第10号, 1948) 31頁掲載の表をもとに筆者作成)

年を「習慣の形成期」、第三・四学年を「分別期」と定義した上で、「分別を生ずるまでに指導的立場の確定を持たなくてはならない」⁴¹とし、「総合授業」を第二学年まで行うものとして捉え直したのである。

以上のように、長野男子附小は、児童の生活の基本的習慣の形成を目的として「総合学習」を捉えた。そのため、国民学校期の皇国民錬成という目的を排除し、家庭の生活から学校生活への適応という目的のみを継承した。それにより、「生活の原理」と「郷土の原理」に基づいて行った児童への「一ヶ年の遊びの生活の調査」と「児童生活の調査」の結果をもとに内容を選択しつつ、社会科の総合的性格を生かして全体像を構想したのである。また、「児童生活の調査」で解明した児童の発達をもとに、第二学年まで拡張させたのである。

次に、長野男子附小が低学年社会科を「総合授業」化した実態について、上述の「総合授業」の特徴を踏まえ、単元表と単元の展開の変化を考察することで明らかにしたい。

4. 低学年社会科の「総合授業」化の実態

4.1 単元表の変化

表5は、第1次案から第2次案への単元表の変化を表したものである。ここから、単元数と単元名について、次の変化が確認できる。単元数については、大幅な増加が見られることである。第1次案では、41個配置されたが、第2次案では、86個配置されている。単元名については、次の3つの変化が確認できる。1つ目は、第1次案の単元がそのまま引き継がれていることである。第一学年では、「1.」「3.」「7.」「8.」「13.」「14.」「18.」「20.」「21.」「25.」「27.」「30.」「32.」「33.」「36.」「37.」「38.」「41.」「43.」「45.」が、第1次案の単元と重なる。第二学年では、「1.」「2.」「4.」「5.」「10.」「11.」「15.」「21.」「22.」「30.」「32.」「33.」「37.」「40.」が、第1次案の単元と重なる。2つ目は、「あそび」に関わる単元が増加していることである。第一学年の「9.」「28.」、第二学年の「9.」「16.」「17.」は、「あそび」「ごっこ」活動による単元である。3つ目は、国民学校期の「総合授業」の生活題目と重なる「生活指導」的な単元が増加していることである。例えば、第一学年の「11.」「16.」「23.」「39.」の季節の行事に関わる単元、第一学年の「5.」や第二学年の「30.」の家庭生活に関わる単元の追加がそれである。これらは、表2の国民学校期の生活題目のうち、「1 国家的儀式行事の生活」を除く4つの分類に該当する生活題目と同じ単元である。具体的には、「2 民族的行事生活」の「善光寺」「端午の節句」「七夕祭」

表 5 単元表の変化

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
第一学年 社会科指導計画 一九四七	1.一年生 2.お花見	3.背くらべ 4.川あそび	5.梅雨 6.教室をかざる	7.時計作り 8.夏休み		9.八百屋さん 10.秋の遠足	11.お弁当 12.運動会	13. お店ごっこ 14. お人形さん	15.教室のお掃除 16.おかあさんの手 伝い	17.かるた会 18.竹スキー	19.勉強のお道具 しらべ 20.私のおうち	21.おひなまつり 22.二年生になる	学習指導年次計画 一九四八
	1.一年生 2.つみ草 3.お花見 4.納骨堂遠足 5.お誕生会のお	6.お花晶 7.背くらべ 8.川あそび 9.粘土あそび 10.石けり	11.鯉のぼり 12.時計作り 13.梅雨 14.教室をかざる 15.夏の川原	16.たなばたまつり 17.朝顔 18.夏休み		19.私の勉強法 20.やあやさん 21.秋の遠足 22.秋分	23.お月見 24.帳面しらべ 25.運動会 26.耳作り 27.おべんとう	28.乗物ごっこ 29.落葉集め 30.お店ごっこ 31.お天気 32.お人形さん	33.教室のお掃除 34.お話会 35.影踏み遊び 36.お母さんのお仕 事	37.かるた会 38.竹スキー	39.節分 40.てんらんかい 41.勉強のお道具 しらべ	42.私のおうち 43.おひなまつり 44.春が来た 45.二年生になる	
	1.二年生になっ て 2.春の野山 3.種まき 4.お医者さん	3.校医の先生 4.学用品調べ	5.島の虫とり 6.つゆ 9.ままごとあそび 10.島 11.つゆ 12.箱庭作り	7.私の町のお話 8.夏休 13.お百姓さん 14.水あそび 15.なつやすみ 16.学校ごっこ		9.おみこし 10.十五夜お月さん	11.お茶の旅 12.運動会 21.十五夜の月 22.運動会 23.果樹園 24.とり入れ	13.配給ごっこ 14.おこたつ 25.町の建物 26.食事時の仕事 27.お店 28.誕生会	15.ままごと遊び 16.たのしいお正月 29.交番 30.お客さまごっこ 31.お正月の遊び	17.通信あそび 32.新年 33.郵便ごっこ 34.雪と氷	18.私の勉強べや 35.消防夫 36.展覧会 37.私の勉強べや 38.おうちの人々	19.学芸会 39.近所 40.学芸会 41.三年生	

※ 1 表中の白抜きは第 1 次案，網掛けは第 2 次案を示す。

※ 2 表中の太字は，第 1 次案の単元，下実線は，国民学校期の「総合授業」の題目と重なるものを示す。
 （長野師範学校男子部附属小学校『社会科指導の研究—指導計画—』（1947）9-41 頁，同『学習指導年次計画 総合学習（一，二年）』（1948）2-74 頁より筆者作成）

「お月見」「お正月」「節分」「雛祭」，「3 学校行事生活」の「私たちの学校」「遠足」「校医の先生」「私たちの身体」「夏休」「夏休後の展覧会」「お話会」「運動会」「音楽会」，「4 郷土的自然の生活」の「春の野」「花晶」「丹波島川原」「朝顔」「秋の晶」「落葉」「お天気」「雪と氷」「春」，「5 遊戯的生活」の「箱庭作り」「買物ごっこ」「お客様」がそれにあたる。

以上のように単元指導計画が修正された背景には，次のことが関係していると考えられる。まず，単元数の増加については，社会科の単元指導計画であった第 1 次案であったが，第 2 次案は，第一・二学年の全教科を含む「総合授業」の単元指導計画として作成されたためである。したがって，第 2 次案は，社会科のみならず全教科が含まれているのである。次に，単元名の変化については，「生活指導」を重視したことである。「3 .」で述べた 1948 年以降の「総合授業」を社会科の内容を中核において実施したこと，国民学校期の「総合授業」の錬成を目的とするものを除く生活題目を導入したことは，「生活指導」の重視が汗液している。また，先述のように，第 1 次案でも低学年は，「生活指導を中心とした総合的取扱い」とされていた。したがって，「生活指導」を中核におく「総合授業」に，第 1 次案の内容をそのまま利用したのは当然の結果であると考えられる。

4.2 単元の展開の変化

次に、第2次案の単元の展開の特色をみてみたい。第1次案と第2次案の単元の展開を示したのが表6である。第1次案は、「作業単元」「趣旨及び主要事項」「学習活動要項」「予備調査」「学習効果の判定」「備考」、第2次案は、「学習単元」「趣旨」「学習要項」「予備調査」「効果判定」「備考」から構成されている。この表を「3.」で述べた「総合授業」の特徴との関連から分析すると、第2次案では、次の2つの特徴が明らかとなる。

1つ目は、第1次案の「学習活動要項」を中心に「学習要項」が組まれていることである。第1次案は、「(1)ままごと遊びをする」「(2)八百屋さんごっこをする」「(3)八百屋さんへ見に行く」「(4)りんご園や野菜畑を見に行く」「(5)学級園の作物の世話をする」という5つの活動で構成されたが、第2次案は、17の活動で構成されている。しかし、このうち「(1)この頃の学校や家庭の食物」「(2)八百屋見学」「(3)八百屋さんごっこ」「(9)野菜や果物をつくっているお百姓さんの仕事」「(11)学級園や畑の作物の手入」は、第1次案の5つの活動と重なる。

2つ目は、第2次案の学習活動は、「遊び」を中心に、1つ1つの活動が継続していくというより各教科を区別せずに、児童に多様な活動の機会が提供するように構成されていることである。第1次案では、「趣旨及び主要事項」にあるように、「野菜やくだものの生産や入手過程を理解させる」ことを目標としていた。そのため、八百屋で人々が野菜や果物を買うことや畑で野菜や果物の生産を学ぶことを重視している。しかし、第2次案では、「趣旨」に「食物についての理解と関心を一層深める」という目標が掲げられ、食物について広く理解することに主眼が置かれている。したがって、子供の生活の中心である「遊び」を中心に、第1次案の「学習活動要項」の他に、「(12)こくごのほん、文庫室の本をよむ」という国語科、「(13)かぼちゃ運びによって基数たす基数の暗算」という算数科、「(14)野菜や果物の写生」という図画工作科、「(16)唱歌『りんごと子供』」「(17)器楽ミルスダンブリン、木琴による合奏」という音楽科の活動が含まれているのである。

このように、第2次案の単元の展開には、「遊び」を中核に置きながら、「生活の原理」と「郷土の原理」に基づいて行われた「一ヶ年の遊びの生活の調査」と「児童生活の調査」の成果に基づき、社会科を中核において活動を構想する意図を読み取ることができる。

表6 第1次案と第2次案における「やおやさん」（第一学年）の単元展開

社会科指導計画 一九四七	作業単元	第一学年「8.八百屋さん」		
	趣旨及び主要事項	<p>秋はりんごや野菜が豊富に児童の目の前に触れる。児童はこれらのくだものや野菜がどんなに作られ、家庭に配られ、入手されるのかということについての理解、関心を余り持っていない。しかし買ってきたり、または畠にできているきれいなりんごや野菜が、自分たちのたべものである点については大きな関心をはたらかせる。この点をとらえて野菜やくだもの生産や入手過程などを理解させる。</p> <p>(一) ままごとあそびや八百屋さんごっこ (二) 八百屋さんのお店しらべ (三) りんご園と野菜畠 (四) 野菜やくだものをたべられるようにするおかあさんの仕事 (五) 学級園の世話</p>		
	学習活動要項	予備調査	学習効果の判定	備考
	(1) ままごと遊びをする	野菜やくだものについての関心態度 遊びの調査	野菜やくだもの種類、生産入手の過程についての理解	
	(2) 八百屋さんごっこをする	経済生活調査（金銭を中心にする）		
	(3) 八百屋さんへ見に行く (4) りんご園や野菜畑を見に行く (5) 学級園の作物の世話をする		野菜やくだもの値段についての関心程度 野菜やくだものがたべられるまでのおかあさんの仕事についての理解 草花についての知識	
学習指導年次計画 一九四八	学習単元	第一学年「20.やおやさん」		
	趣旨	<p>秋の野菜や果物は児童の大きな関心をもっているものである。しかしこれらのものがどんなに作られ、家庭に配られ、入手されるかということについての理解関心をあまりもっていない季節の果物や野菜に対する関心に基いて、これらのものを中心に食物についての理解と関心を一層深める。</p> <p>○家庭や学校では食物について心配してくれること ○やおや「商店」が自分たちの食生活に役立っていること ○野菜やくだものが役立っていること ○野菜やくだものが人の保護を受けていること ○家庭や学校では季節季節にその用意をすること ○食物の清掃のしかた ○学級園や作物の手入れ ○生活文の書きかた ○文章の読解力 ○奇数に奇数を寄せて、一〇以上繰上らない計算（暗算） ○写生の初歩的表現観察力 ○粘土による果物の自由な曲面の表現 ○歌唱器楽のリズム表現</p>		
	学習要項	予備調査	効果判定	備考
	(1) この頃の学校や家庭の食物	季節の野菜、果物の種類		
	(2) 八百屋見学			
	(3) 八百屋さんごっこ			
	(4) 果物や野菜のねだんをしらべる			
	(5) 果物の絵集め			
	(6) 果物、野菜の入手の過程をしらべる	食物に対する関心態度	果物、野菜の入手過程に対する理解	八百屋
	(7) 食物をつくる母親の仕事		お母さんの仕事の理解	
	(8) 野菜や果物が食物として役立っていること		お手伝いの態度	経験領域調査
	(9) 野菜や果物をつくっているお百姓さんの仕事			果樹園
	(10) 食物を清潔に保つ方法や取扱			八百屋市場
	(11) 学級園や畑の作物の手入れ	作物、学級園の手入れのしかた		
	(12) こくごのほん、文庫室の本をよむ			
	(13) かばちや運びによって基数たす基数の暗算	構図のとりかた	観察の力	学級園
	(14) 野菜や果物の写生	表現に適する野菜果物	形のとらえかた	
	(15) 粘土あそび「果物づくり」眼と手の感覚			
	(16) 唱歌「りんごと子供」		器楽によるリズム感	
	(17) 器楽ミハルスダンプリン、木琴による合奏			

※太字は、第1次案の学習活動と重なるものを意味する。

（長野師範学校男子部附属小学校『社会科指導の研究—指導計画—』（1947）17 頁，同『学習指導年次計画 総合学習（一，二年）』（1948）16,17 頁より筆者作成）

5. 結語

本稿では、成立期の低学年社会科の実施過程の一端として、1947年度指定教科書局実験学校である長野男子附小による低学年社会科の「総合授業」化を検討した。以上の考察から、次の点が明らかになった。

第一に、「総合授業」化の背景には、児童の「全生活をあらゆる機会を与えて発達」させるという低学年教育のねらいの実現のため、「総合授業」に着目した経緯があった。終戦後は、1947年2月以降に「総合授業」を再開し、1948年1月の初等教育研究会が契機となって1948年度から「総合授業」の研究が活発化した。その際、「子供の全生活をあらゆる機会を与えて発達させる」ことを低学年教育のねらいと定め、その実現のために、国民学校期の「総合授業」を再考した。

第二に、1948年度以降の「総合授業」は、国民学校期のものの一部を継承しつつも、社会科を中核において展開したことである。1948年1月以降の長野男子附小は、「児童の生活の基本的習慣の形成の確立」を「総合授業」の目的とした。そのため、国民学校期の「総合授業」の目的である皇国民錬成を排除し、家庭の生活から学校生活への適応という点のみを継承した。それにより、「生活の原理」と「郷土の原理」に基づいて行った「一ヶ年の遊びの生活の調査」と「児童生活の調査」の結果により、学習内容を選択したのである。その際、社会科の総合的性格をいかして全体像を構想しつつ、「児童生活の調査」で解明した児童の発達に基づいて第二学年にまで拡張した点に特徴があった。

第三に、第2次案が「総合授業」とされたことで、単元表と単元の展開に次の変化が表れた。単元表の変化は、第1次案の単元のそのままの配置、「遊び」の単元の増加、国民学校期の「総合授業」の生活題目と重なる単元の増加の3点である。単元の展開の変化は、第1次案の「学習活動要項」を「学習要項」の中核に置き、「遊び」の活動や他教科の活動が増加したことの2点であった。

以上から、長野男子附小における低学年社会科の実施は、『要領Ⅰ』に基づく、一教科としての具体化ではなかったと言える。長野男子附小は、「要領Ⅰ」の具体化のために教科書局から指定された実験学校であり、『要領Ⅰ』の編纂責任者の重松との関わりもあった。しかしながら、低学年社会科の「総合授業」化に否定的な重松の指導を受けながらも、1948年1月の段階で、「総合授業」の中で社会科を実施しようとしたのは、教官たちが、国民学校期の「総合授業」の成果を生かしながら、「生活指導」としての低学年教育の必要性を認識していたからであった。このことは、成立期の低学年社会科が、『要領Ⅰ』をそのまま具体化したというよりも、当校の経験に基づいて独自に展開されたということを意味する。

なお、同時期に、先述の北陸信越地区社会科教育研究協議会のパネルディスカッションの開催校であり、長野男子附小と同じ長野師範学校の附属学校であった長野女子附小も低学年教育に力を入れている。次なる課題は、本稿での研究成果を踏まえた上で、長野女子附小における低学年社会科の実施経緯を比較検討することで、成立期の低学年社会科の実施過程をより明確にすることである。

註

- 1 当時、東大カリキュラム研究会は、「コア・カリキュラムは総合学習を誘い、特に小学校低学年に於ける総合全一学習を成立させるようになった。こうした傾向は昭和二十三年になって極めて明瞭になったのであるが、これはどのような結果をわが国のカリキュラム編成に与えたのか。それは今日の段階に於いて正しくとりあげられなければならない。」と述べている。(海後宗臣監修カリキュラム研究会著『日本カリキュラムの検討』(明治図書、1950) 6 頁。)
- 2 パネルディスカッションでは、「一、討議議題の決定」「二、作業単元の設定について」「三、討議学習について」「四、目標の設定について」が議題となった。中でも、「二、」に重点が置かれ、「1、旧単元と新単元」「2、旧単元の行きづまり」「3、児童生活の反省」「4、実態調査」「5、作業単元の数」「6、大単元と小単元」が討議された。パネラーは次の通りである。重松鷹泰(文部事務官：司会)、上條為人(長野師範学校女子部附属小学校)、斎藤定雄(同)、伊藤朝雄(長野師範学校男子部附属小学校)、神波利夫(同)、泉屋清(石川師範学校女子部附属小学校)、林繁樹(福井師範学校男子部附属小学校)、岡田吉兵衛(石川師範学校男子部附属中学校)、牧田利平(新潟第二師範学校附属小学校)、宮正安(新潟第一師範学校女子部附属小学校)、小西信三(富山師範学校男子部附属小学校)。(長野師範学校女子部附属小学校『社会科の研究』(1948) 15, 16 頁。)
- 3 前掲(註2) 30 頁。
- 4 木村博一「『学習指導要領社会科編Ⅰ(試案)』に戦後日本の特質—社会科における民主主義と道德教育をめぐる一」(『社会科研究』第40号、1992) 133-142 頁。
- 5 例えば、次のものがある。谷本哲郎「小学校社会科における総合学習的取り組みについて—戦後社会科成立期における石橋勝治の実践からの一考察」(『四天王寺国際仏教大学紀要』第44号、2006) 157-172 頁。
- 6 中野重人「低学年社会科の存続か廃止か」(社会認識教育学会『社会科教育学ハンドブック—新しい視座への基礎知識—』(明治図書、1994) 257 頁。
- 7 拙稿「文部省教科書局実験学校における社会科単元指導計画の作成—青木誠四郎の社会科教育論を手がかりに—」(日本社会科教育学会『社会科教育研究』第112号、2011) 38-50 頁。
- 8 拙稿「1947年度指定文部省教科書局実験学校における社会科教育の実施過程—長野師範学校男子部附属小学校による社会科単元指導計画の修正に着目して—」(中等社会科教育学会『中等社会科教育研究』第30号、2012) 29-42 頁。
- 9 前掲(註8) 38, 39 頁。
- 10 重松鷹泰・信州大学附属長野小学校『総合学習の展開』(明治図書、1979) 13 頁。
- 11 畔上一康「信州大学教育学部附属長野小学校の総合学習の研究の歴史—『総合』の意味するところ—」(笠原始編『“生きる力”を育てる総合的な学習の構想』(明治図書、1997) 219 頁、青木真由子・土井進「附属長野小学校2003年度卒業生の総合学習に関する事例研究—6年間の総合学習によって『身についた力』—」(『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第8号、2007) 75 頁。
- 12 小松恒男『教科書を子どもが創る小学校』(新潮社、1982) 239 頁。
- 13 前掲(註11) 以前に当校が発行した『低学年教育の改造』(明治図書、1970) では、第1章で「本校低学年指導の歩み」として、当校の総合学習の歩みをまとめている。しかし、内容は大正期の「研究学級期」、国民学校期の「総合学習第一期(総合授業)」の後、昭和30年代の「総合学習第二期(ごっこ・スモールプレー)」として、昭和20年代の動向に触れていない。
- 14 研究会では、「やおやさんごっこ」(第一学年)「遊具のいろいろ」(第二学年)が公開された。

- 15 『長野師範学校男子部附属国民学校要覧（昭和十九年五月）』によれば、第一年級の丸山利雄、倉田利久、宮下正治訓導は、それぞれ「初一ノ一 実業科，農耕，作業，理科，職業指導，放送映画」「初一ノ二 国史，体操，特設防護隊，營繕」「初一ノ三 国語，体操，軍人援護，図画，作業」を担当したことが確認できる。ここから分かるように，訓導の職務の中心が，戦争に関わる事項となり，「総合授業」が行われた跡はない。（長野師範学校男子部附属国民学校『長野師範学校男子部附属国民学校要覧（昭和十九年五月）』（1939）2-4 頁。）
- 16 長野師範学校男子部附属国民学校「我が校に於ける教育の実際」（『国民教育低学年』第6巻第8号，1947）26-37 頁。
- 17 報告内容に関わる史料は，残されていないが，『昭和二十一年度 学校日誌』から次の報告題目が確認できる。2月2日：「新教育と実験学校の経営について」（主事薄井慎吾）「新教育実践の諸問題」（教官矢口亨）「公民科の使命とその指導」（教官大江亀治）2月3日：「生活調査と生活指導」（教官伊藤朝雄）「総合授業について」（教官村田好道）「国語における基礎調査と国語指導」（教官内山一也）2月4日：「算数指導の諸問題」（教官赤羽千鶴）「社会科への構想」（教官神波利夫）
- 18 冊子「文部省実験学校報告書—テーマ児童の数理生活を中心に報告—総合授業の指導案例 昭和21.22年の一事例」の内容は次の通りである。「序章 一年生の算数生活」「第一章 一年生の算数学習の様相」「第二章 指導案例 生活題目『時の記念日』指導案例」「同 第二学年 分化期のさんすう」
- 19 初等教育研究会の日程は次の通りである。1月29日：「新教育に於ける個性・人間性の意義」（主事清水悟朗）「新教育と効果判定」（教官高池義則）「国語指導上の主要問題と効果判定」（教官宮下正治）「社会科に於ける効果判定」（教官倉田利久）1月30日：「社会科に於ける効果判定」（教官倉田利久）「家庭科指導の実際と効果判定」（教官柳沢実）「体育科におけるダンス指導と効果判定」（教官渡辺三次）1月31日：「総合授業について」（教官松下義敏）「理科指導と効果判定」（教官竹内丑雄）（長野師範学校男子部附属小学校『昭和二十二年度 学校日誌』）
- 20 長野師範学校男子部附属小学校『昭和二十三年度 学校要覧』（1948）10，11 頁。
- 21 1948年度の担当教官は，次の通りである。下島節（1ノ3：1942年3月～）「国語，総合授業，PTA 教科研究会，会計」深澤正（2ノ2：1947年3月～）「社会，総合授業，自由研究」村田好道（3ノ3：1940年3月～）「算数，総合授業，教科研究会，統計」（前掲（註20）3頁）
- 22 長野師範学校男子部附属小学校『学習指導案集録』（1948）1，2 頁。
- 23 村田好道「年を新にして低学年教育に望むもの」（『低学年教育技術』第1巻第10号，1948）30 頁。
- 24 前掲（註23）31 頁。
- 25 長野師範学校男子部附属小学校『社会科指導の研究—指導計画—』（1947）6 頁。
- 26 村田好道「総合学習の指導計画」（『教材研究』第3巻第4号，1948）38 頁。
- 27 前掲（註26）39 頁。
- 28 東京高等師範学校附属小学校の主事佐藤保太郎も「この計画はちょっとの思つきやデスクプランではなく，既に八年の長い間の経験記録であることである。その根気強さと，しんしな教育態度に対して自ら尊敬の念がわくのである。」と評価している。（佐藤保太郎『総合学習の指導計画』に対する意見（『教材研究』第3巻第4号，1948）45 頁。
- 29 このことについては，次の記述がある。関連については，「研究学級の実践を直接継承するものではなかったが教科のわくをはずし，児童の心意と生活に即して生活題目を単元とする経験学習であった」。相違については，「総合授業と，大正期におかれた研究学級の相違点は，研究学級がその目的も方法も児童を原理として，児童の個人完成をめざ

し、教科によらず児童の生活にもとづいて教育を再構築しようとしたものであったのに対して、総合授業は、どこまでも皇国民の錬成が目的であり、初等科二学年でおこなう教科学習を前提として、教科への過渡的扱いとして方法上児童から出発しようとしたものであった。すなわち、総合授業は、国家を目的とし、錬成を方法原理とする国民学校教育において、未分化の時期の取扱いとして、教科への橋渡しとしてとられた授業方法であった。」という記述。(信州大学教育学部附属長野小学校『信州大学教育学部附属長野小学校百年史』(1986) 605, 608 頁。)

- 30 次の研究で指摘されている。天田邦子「国民学校の教育実践構造—長野県師範学校付属国民学校の事例を中心として—」(『上田女子短期大学紀要』第7号, 1984) 163-184 頁, 池田昭「社会科教育における総合の理論 第2部 国民学校における総合授業」(『中京女子大学紀要』第20号, 1986) 125-136 頁, 清水毅四郎『合科・総合』教育論の系譜の研究(5)—長野師範附小の『研究学級』と『総合授業』—(『信州大学教育学部紀要』第65号, 1989) 97-108 頁, 久保義三『新版 昭和教育—天皇制と教育の史的展開—』(東信堂, 2006) 424-434 頁。
- 31 長野師範学校男子部附属国民学校『国民学校における総合授業』(信濃毎日新聞社出版部, 1942) 17, 18 頁。
- 32 前掲(註31) 42 頁。
- 33 前掲(註31) 45 頁。
- 34 前掲(註31) 46, 47 頁。
- 35 次の児童用書と教師用書が使用された。児童用書: ヨイコドモ上下, ヨミカタ一・二, コトバノオケイコー・二, カズノホン一・二, ウタノホン上, テホン上, エノホン一・二。教師用書: ヨイコドモ上, ヨイコドモ掛図初等科第一学年前期用, 後期用, ヨミカタ一・二, ヨミカタ掛図初等科第一学年用, テホン上, テホン掛図初等科第一学年用, エノホン一・二, 国民学校彩色指導用掛図初等科第一学年用, 芸能科図書鑑賞指導用掛図「初一」一・二・三・四・五。
- 36 松下義敏「総合授業について(一)」(『信濃教育』第736号, 1948) 8 頁。
- 37 前掲(註36) 8 頁。
- 38 松下義敏「総合授業について(二)」(『信濃教育』第737号, 1948) 13, 14 頁。
- 39 前掲(註38) 14 頁。
- 40 前掲(註38) 13 頁。
- 41 前掲(註38) 13 頁。

付 記

本稿の執筆にあたり、信州大学教育学部附属長野小学校の畔上一康副校長先生には、史料の閲覧において格別の御配慮を賜りました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

(2013年11月14日 受付)
(2014年 2月13日 受理)